



環境倫理の諸問題

1. 環境問題の認識
2. キリスト教と環境問題
3. 環境問題に対するキリスト教の応答
4. 環境倫理をめぐる課題と展望



1. 環境問題の認識

2



エコロジー(生態学)とは何か？

- ◆ もともとは生物とそれを取り巻く環境との関係を研究する生物学の一分野。
- ◆ ドイツの動物学者E・ヘッケルが1866年に著作の中で用いたのが最初。
- ◆ 自然保護運動の高まりと共に、今では生物学の領域を超えて、広く環境保護という意味で用いられるようになる。

3



エコロジーに関連する言葉

- ◆ 語源はギリシア語の「オイコス」(家)
 - ❏ エコノミーも同様。
 - ❏ 環境問題と経済問題は表裏一体の関係にある。
- ◆ 「地球にやさしい」?
- ◆ 「宇宙船地球号」?

4



環境問題の先駆者(1)

◆ レイチェル・カーソン
(1907-1964)

- ❏ 1962年、『沈黙の春』
- ❏ 「アルベルト・シュヴァイツァーに捧ぐ。シュヴァイツァーの言葉——未来を見る目を失い、現実に先んずるすべを忘れた人間。そのゆきつく先は、自然の破壊だ」。



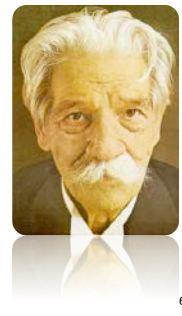
5



環境問題の先駆者(2)

◆ アルベルト・シュバイツァー
(1875-1965)

- ❏ 「生命への畏敬」
- ❏ 「わたしは、生きようとする生命に取り囲まれた生きようとする生命であるという事実」
- ❏ 生命中心主義の先駆者的役割を果たす。



6



環境問題の先駆者(3)

- ◆ 神の信託管理人思想
 - ☒ ウォルター・C・ラウダーミルク(1888~1974)
 - 第十一戒「汝、聖なる大地を、忠実なる僕(steward)として神より相続し、世を次いで、その資源と生み出す力を守るべし」。
- ◆ 生命中心主義
 - ☒ 生命あるいは生態系が最優先される。人間の価値は相対化される。
 - ☒ ディープ・エコロジー
- ◆ 動物権主義
 - ☒ 「動物の解放」運動

7



2. キリスト教と環境問題

8



キリスト教と自然

- ◆ 道徳的指標としての「自然」
- ◆ 野蛮としての「自然」
 - ☒ 「黒人のもとでの奴隷制度のありかたからみちびきだせる、わたしたちにとって興味のある唯一の教訓は、自然状態というものが絶対の徹底した**不法の状態**である、という理念の正しさです」(ヘーゲル『歴史哲学講義』)
 - ☒ 自然は人間によって**支配**されるべき対象。

9



原生自然に対する態度

- ◆ キリスト教的伝統の中では、「原生自然」(wilderness)は、呪われた大地、楽園の対極と見なされた。
- ◆ 「原生自然」やそこに生息する野生動物に対する適切なキリスト教的態度は「征服」「鎮圧」であった。

10



キリスト教の生態学的責任

- ◆ リン・ホワイト論争
 - ☒ 1967年、リン・ホワイト・ジュニア「今日の生態学的危機の歴史的源泉」
 - ☒ 生態学的危機の原因は、キリスト教の人間観・世界観にあると指摘した。

11



リン・ホワイトの主張(1)

- ◆ 「物理的創造のうちどの一項目をとっても、それは人間のために仕えるという以外の目的をもってはいない。そして人間の身体は粘土から作られたけれども、人間は単なる自然の一部ではない。人間は**神の像**を象って作られているのである」。

☒ → [創世記1:27-28](#)



リン・ホワイトの主張(2)

- ✦「キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知っているなかでもっとも人間中心的な宗教である。……キリスト教は古代の異教やアジアの宗教(おそらくゾロアスター教は別として)とまったく正反対に、**人と自然の二元論**をうちたてただけではなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのであった」。

13



リン・ホワイトの主張(3)

- ✦「自然は、人間に仕える以外になんらの存在理由もないというキリスト教の公理が斥けられるまで、生態学上の危機はいっそう深められつづけるであろう」。

14